

第94号

令和6年7月19日

高一 豊浦脩生
菱村一陽

読書三昧

甲南中学・高校
図書館
図書委員会
芦屋市山手町
31番3号

古本市について

二〇二三年度の古本市は、十月一日（文化祭二日目）に行い、中学三年e組の教室で開催しました。今年度寄付された本と二〇一八年の古本市で売れ残った本の計二、〇二八冊の本を店頭に並べることができました。古本市で、五八〇冊、五二、九〇〇円の売り上げとなり、歴代最高額を記録しました。この度の収益はシャンシテイ国際ボランティア会に一万円を寄付しました。以下にその様子を報告します。

準備について

準備は七月の中旬から開始していた。

① 「古本の選別」

二、二〇八冊の本を以下のジャンル別に分類した。

- ・単行本（物語）
- ・単行本（実用）
- ・漫画
- ・新書
- ・文庫
- ・児童書
- ・FR生徒おすすめ本（図鑑、医療本）
- ・雑誌



パネル・机の設置や本の搬入などを行った。パネルを設置することで、図書委員の休憩室（黒板側）と販売場所の二つに分けた。そして、机は壁沿いと中央に設置し、中央には目玉商品を並べることで、来場者の目につきやすいようにした。ま

た、多くの方が来て、迫感のないように、通路は広めに設けた。

② 「店舗の作成」

入り口（左側）から入場して順に以下のように陳列した。

- ・単行本（物語）
- ・漫画
- ・単行本（実用）
- ・新書
- ・文庫
- ・雑誌
- ・児童書
- ・FR生徒おすすめ
- ・G生徒おすすめ



③ 「本の陳列」

「文庫」や「新書」は立ち読みする人が多くないと予想したため、入り口付近の混雑を避けるべく一番奥の窓付近に配置した。

販売について

販売については量り売り方式を採用した。

値段表	
500g未満	150円
500g	150円
1000g	300円
1500g	450円

史記や古い全集ものは段ボールに詰めた、セツト販売でお得感を演出した。シリーズが揃っているものは「セツト売り」にし、そうでないものは単品で販売した。これらの価格設定は、図書委員一同で考えたもの

のだが、結果的に、商品一つ一つに値段をつける手間を省略できた分店内の設営に時間をかけることができた。

ポスターなどの張り出しのチラシ、放送による宣伝は、歴代の先輩が作成した広告に加えて、校内で宣伝するための看板や、会場の出入口に貼る案内などは新たに作成し



た。校内に貼るビラについては、人の通
行量が多い場所に貼っ
た。

来場者の集計

来場者については、
時間ごとに大まかな
統計をとった。結果
としては、九時～十
時は来場者が上昇傾
向にあり、十時～十
二時が最も来場者数
が多く、十二時～十
四時では減少傾向に
あるということが分
かった。十四時～十
五時が最も来場者数
が少ないという結果
となった。閉店一時
間前の十四時頃には、
全本を半額にするこ
う放送を行なった
ところ、来場者が再
び増加した。

(高三 金岡泰智)

感想

今回の古本市は私
にとって初めての
大きなイベントだっ
たので、不安な気持
ちも少なからずあり
ましたが、先輩方や先

生と協力して素晴ら
しいイベントにする
ことができ、胸がいっ
ぱいになりました。

二千冊以上の本に圧
倒されたり、準備が
期限までに終わるか
際どくなったりと、
苦悩もありましたが、
それを乗り越えるた
びにチームの結束が
強くなり、古本市へ
の期待が膨らみまし
た。そして古本市当
日にはたくさんのお
客さんに満足しても
らえたと思います。

(高一 豊浦脩生)

今回の古本市では
準備が特に大変であ
った。本の分別や冊数
を数えることに特に
時間がかかった。前
回は二〇一八年に行
われ、時間が空いて
いた為、引き継ぎが
とても大変であった。

そして今回僕たちは
次の世代の後輩が引
き継ぎしやすいよう
にと、一番時間のか
かった本の整理は頑
張ったつもりである。
古本市ではお客さ
んが見やすいように
と様々な工夫をした。
例えば段差を作る、
作者や出版社別で並
べるといったことで
ある。この作業はこ
だわり出すと終わら
ないかと思われたが、

皆で協力し、なんと
か納得のいく形まで
完成できた。
当日は予想を遥か
に超えるお客さんの
数により、さばくの
が大変であった。始
まってから終わるま
でほとんど休む時間
がなかった程である。
しかし、沢山売れた
為、頑張った良かった
と感じている。
(高三 重田清貴)



図書委員で 本を選んできました



2023年12月29日にジュンク堂三宮店にて図書委員
店頭選書を行いました。今回は図書委員7名が参加
し、計44冊を選書しました。甲南生に読んでもらい
たい本をピックアップして紹介します。
(高三 山下哲平)

『高校生が感動した数学の物語』

山本俊郎 著 研究社 (420 / 10 / 4)

(高三 山下哲平)

私は店頭でタイトルに惹かれ、「面白そうだな」と思いこの本を選
びました。まず、この本は学校の授業では取り上げない数学史から
「数学を知る」ところから始まっています。私自身、世界史に興味を
持っているのですが、数学史から世界史を見て、両者の歴史が交差する瞬
間に対して非常に心が躍りました。また、数学史と一緒に数学を学ぶ
ことで、数学の公式の由来や定義などを深く理解することができると
め、数学の知識を定着させながら楽しめる本であると思います。第一部の第一章
は私も含め、数学が得意ではない人でも
読みやすくなっています。ぜひ一度読ん
でみて下さい。



『最強に面白い微分積分』

高橋秀裕 NEWTON PRESS (413/3/夕)

(高三 柴田武則)

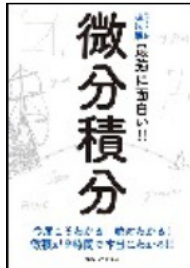
「微分積分って何？」と聞かれて、皆さんははっきりと説明できるだろうか。或いは、そもそも理解しようとするのを「億劫だから」という理由で避けてははいないだろうか。なかんずく読書三昧を御一読するような人の中には、潔く否定できない人も多いと思う。私もその一人だった。

数学が楽しくないと感じる最も大きな要因は、何に使えるのか分からないことだと思う。特に高校で学ぶような数学に於いてはそういったことが往々にしてある。それが転じて「学んでも意味がない」と感じた瞬間、人は数学を無駄なものだと言う。この本を読めば、その認識が変わるかもしれない。

この本では、微分法と積分法がどういう経緯で誕生し発展したのか、丁寧に解説してくれる。どんな技術だって、誕生したからにはそれだけ当時「必要」されていた経緯がある、と筆者はいう。そのキーワードは「砲弾の軌道計算」と「ニュートン」だ。戦争の多かった近世ヨーロッパでは、各国共により強力な大砲の開発に勤しんだ。その過程として、微分法が誕生したというのだ。

加えて、この本は新書サイズで読みやすく持ち運びやすい。

今数学が楽しく感じていない人、少しでも数学が得意になりたいと思っている人は、ぜひ手に取ってもらいたい。



『影踏亭の怪談』

大島清昭 創元推理文庫 (y/おお)

(高一 菱村一陽)

私は民話、怪談、ミステリーが好きである。なのでこれらのジャンルを混ぜたこの本を私が店頭選書で選んだのは必然だったかもしれない。この作品の始まりは主人公である怪談作家の梅木杏子が怪異のせいとしか思えない姿、意識不明の状態で見送られた。その事件を解決したいと思った弟の話から始まる。この話で私が面白かったと思ったところは、主人公である梅木杏子の怪異に対する姿勢である。彼女は「怪異には法則性、規則がある」としている。この話では彼女のその理論を中心として様々な事件が解決され、またつながる。読むときに、この伏線を探してみるのもお勧めしたい、全体的にこの話は彼女の原稿として語られ、レポートの如く事務的に記されているが、おどろおどろしく、ダークな雰囲気を出している。妖怪や怪談話のスパイスがよく効いている。この話の見どころはこの本の終幕がミステリアスでホラーテイストで終わるところだ、これがまた衝撃的で興味がそそられるのである。この本は非日常、ホラーを味わいたい人々に推奨したい。



灘甲戦での読書会

二〇二三年六月十八日、灘中学校・高等学校図書館にて、甲南と灘の交流会を行いました。自己紹介をしたのち、課題本『舟を編む』についての感想を交換し、背景を考察しました。はじめは緊張の為か引き締まった空気でしたが、互いに好きな本の話や部活動質問する等して和気あいあいとした雰囲気となりました。

(高三 柴田武則)

玄武書房に勤める馬締光也は営業部では変人として持て余されていたが、新しい辞書『大渡海』編纂メンバーとして辞書編集部に迎えられる。個性的な面々の中で、馬締は辞書の世界に没頭する。言葉という絆を得て、彼らの人生が優しく編み上げられていく。しかし、問題が山積みの辞書編集部。果たして『大渡海』は完成するのか。言葉への敬意、不完全な人間たちへの愛おしさをうたいあげる三浦しをんの最新長編小説。



『舟を編む』

三浦しをん 光文社 (y/みう)

『夜果つるところ』

恩田陸 集英社 (y/おん)

(高一 豊浦脩生)



この本は、著者の恩田陸さんが執筆した『鈍色幻視行』の作中で登場した幻の作品を現実で読めるという今までにない読書体験を味わうことができます。動乱の時代の遊郭という背景設定で序盤は輪郭がぼやけたミステリアスな雰囲気

で、次第に解像度が上がっていき、生々しくて独特な世界観でした。一体「墜月荘」とはなんなのか、主人公の正体はなんなのかという疑問が徐々に明らかになり、ラストのどんでん返しにはとても驚かされます。ぜひ『鈍色幻視行』と合わせて読んでみてはいかがでしょうか。



感想

灘校生との交流会は、レベルが高かったです。今回は初めてショートショートを読んだが、一つ一つ話が簡潔でとても読みやすかったです。また一つ一つの物語を見てみると共通点や筆者の癖などがあって面白かったです。今回の交流会をきっかけに、物語と日常生活との関連性から学ぶことが大事だと思います。

これから沢山の本を読み、読解力を上げていきたいと思えます。(高二 山下哲平)

普段私は本を読むだけで終わるので本の内容を深く読み込んで話すのは新鮮でした。灘高生とも交流できたのがいい経験になった。(高三 笠谷圭吾)

一つの本を深く考察して意見交換する経験が無かったので、

とても新鮮で面白かったです。今まで読んできた本を読んで、違う視点で物語を見てみたいと思います。ほとんどの人が意見を積極的に発言して、いい雰囲気だったと思います。また、灘中高の方の考察力や知識の多さに圧巻されました。(高一 豊浦脩生)

図書委員交流会

一〇二三年十一月十一日土曜日に小林聖心女子学院で行われた図書委員会の交流会に参加しました。参加は小林聖心、海星、関西学院、龍谷、神戸女学院、神戸山手、六甲、雲雀丘、百合、そして甲南の計十校、三十二名でした。

図書館見学、自己紹介をした後に、グループに分かれて、「理想の学校図書館」についての意見交換をしました。

私は、久しぶりの交流会の参加ということもあり、緊張していたけれども、とても和やかな雰囲気だったので発言しやすく、楽しくて貴重なことでした。初めに小林聖心女子学院の学校図書館を見学した後に、各自自己紹介カードと好きな本を持ち寄って自己紹介をして、互

いに打ち解けることができました。今回の交流のテーマは「理想の学校図書館について語り合おう」というもので、班に分かれて話し合いが行われました。そこで様々な意見が次々と出揃い、いつの間にか机の上の模造紙にはたくさんの方の夢が詰まった図書館像が出来上がっていきました。例えば図書館

にハンモックやクッションなどがある寛ぐスペースあったり、個室の自習室があるという設備面から、図書館でキャンプをしたり、企業とのコラボをするといった

イベント面についてなど、多岐に渡りました。甲南図書館にも導入してみたい面白そうな案も数多くあったのでとても胸が躍りました。今回の交流会で他

校の同じ志を持った図書委員会の方と交流することができ、今後の活動の励みになりました。今回得たアイデアなどを用いながら、これからも活動していきたい

と思います。(高一 豊浦脩生)



町田そのこ 小学館 (y/まち)

教員 本紹介 国語科 覚野吾郎先生

『宙ごはん』

前世は飢え死にした犬だったのでなからうか。そう思う節がときどきあるぐらい、食べることが好きだ、というか執着がある。と、同時に、小説も読み始めると止まらなくなるので、読む時期を選ぶ。そんな私は、食事と読書はある意味似ている、と捉えている。料理と小説も然り。インスタントはインパクトがあっておいしい。ただ、そればかりだと単調になってくる。滋味あふれる味わい深い料理は格別の満足感を与えてくれ、体に染み込んでくる気がする。一方で、キャラクター設定が明確で、一話一話が短くて読みやすい小説も面白い。ただ、よくできた小説は、より深い気持ちの揺さぶられ方をし、読後に深い満足を与えてくれる。

町田そのこさんの小説は、繊細な心のひだを美しい言葉で紡ぎ出す。「宙ごはん」では、章ごとにテーマとなる料理があり、その料理にまつわるエピソードで構成されていく。それぞれの料理には意味があり、例えば、作中のパンケーキは、人の心を溶かし、動かし、心を震わす。その様子が、町田そのこさんを選ばれた言葉によって色を与えられ、その繊りなす色で細やかに描写されていく。

料理も小説も時間をかければいいというものでもないが、しっかりと作られたものは自分の知らない世界を広げ、人生に彩りを与えてくる。趣味嗜好といえばそれまで、好みもある。タイプ結構。ただ、それだけでは得られない世界がたしかにある。一度、食わず嫌いをせずに、手に取って読んでみてもらえたら幸いである。